

【女性職員の活躍と支援】

男女を問わず能力を発揮できる環境作りについて、職員自身の体験談をお届けします。

「社会的な属性にとらわれず、豊かな研究人生を切り拓こう」



インタビュー①

先進製造プロセス研究部門
首席研究員（中部センター）

かとう かずみ
加藤 一実

研究者の素質に、性別なし

私が研究グループ長を務めるテラードリキッド集積研究グループでは、金属有機化合物や金属無機塩の働きによって、ナノレベルの精緻な構造を作り出す溶液「テラードリキッド」の研究をしています。幾何学的な形状をした単結晶粒子が積み木のように積み重なっていくことで、素子などの機能性材料をボトムアップ型の製造プロ

セスで作り出せるようになるなど、今後の産業への応用が期待される分野です。

この道に進むにあたって、同世代で女性の研究者は極めて少数でしたが、それでも迷いはありませんでした。最初に務めた研究所の採用面接で、「これから産業界の方々と仕事をするようになるが、女性は大変だよ」と言われたのですが、性別の違いが何故、研究に影響するのか、質問の意味がわかりませんでした。確かに、本気で取り

組めばこそ、人と意見が衝突することもあるでしょう。でも、それは男性でも女性でも同じですよ。現在では、研究者たちの報告を受けて全体を取りまとめたり、共同研究先の企業とともに新しい提案を行ったりする立場になりましたが、その考え方は研究者になった当初から今に至るまで、変わることはありません。

世代や国籍を越えた研究体制

その意味では、人種や国籍の問題もまた同じです。実は、これまで私たちの研究グループに参加したポスドク全12名のうち、10名が外国の方でした。当然、それぞれに文化背景や仕事に対する道徳観が異なるため、最初は戸惑

うこともありましたが、今では一人ひとりの個人的な特質を見据えながら接するようにしています。つまり、属性ではなくそれぞれの個性を尊重する、ということですね。

次に、世代の差の問題があります。最近の若い研究者との間で最も感覚的な違いを感じるのが、言葉遣いです。でも、たとえ電子メールの文面が正確な敬語でなかったとしても、私が若い頃は電子メールというツール自体が存在していなかったわけですから、これも新しい文化だと考えて寛大に受け止めるように心がけています。その最たるものが、「ヤバい」という言葉。「ヤバいです！」という報告を受けて、「何か大変な事故が起きたのでは？」と冷や汗をかいたところ、「予想以上の成果が上がって、すごい！」という意味だった……という話を聞いた時は、思わず笑ってしまいました。

自分の世界を広げる、海外経験

また同様に、地域ごとの研究拠点にも、少なからず差は存在すると考えています。私も中部センターの研究者として、自分たちの研究のオリジナリティを大切にしていますし、地域によってどちらが上という認識はありません。つくばセンターであれ、それ以外であれ、お互いを認めながら連携していくこと。これもまた、多様性にかかわる取り組みだと思います。

つまり、研究者である以上、大切なのは社会的な属性ではなく、その人自

身の探究心と感受性だということです。もちろん、何もかもが個性として認められるわけではないですが、産総研の研究者として社会の中で果たすべき役割と真摯に向き合っていれば、その範囲内でバラエティがあってもいいと思います。研究という目的から考えても、一人で黙々と取り組むより、さまざまな知識や見方をもった人と接することで理解が深まり、より力強く前へと進んでいけるはずです。

だからこそ、今の若い人にはぜひ、海外で経験を積んできてほしいと思います。私も二度にわたるアメリカ留学で得た経験が、その後の研究やものの考え方に大きな影響を及ぼしています。「帰国した後のことが心配」という理由から、留学を希望する若手研究者が少ないという話を聞きますが、逆に若い時こそ、進んで挑戦できるチャンスだと思うのです。恐れずに日本の外へと飛び出すことで、さまざまな価値観に接しながら、自分の研究や世界観を広げ、自分自身を高めていってほしいと思います。

多様で豊かな人々とともに

私自身、この仕事に対するモチベーションになっているのが、わからないことを解明していくプロセスの面白さです。若い頃、ただひたすら研究に打ち込む日々の中で得た驚きや感動は、今でも忘れることができません。当時はまだ電子顕微鏡のモニターも小さく、部屋全体を暗くする必要があったため、真っ暗な部屋の中で一人、モニターを覗き込んだところ、画面全体に同じ大きさの穴が開いた膜構造が広がっている様子を、思わず鳥肌が立ち



テラードリキッド集積研究グループの実験室

ました。あの体験が脳裏にこびりついていて、今でも私の大きな原動力になっています。

もちろん、人それぞれに考え方や経験が異なるのは当たり前のことです。その上で、若い研究者たちにはぜひ、人生を変えるような発見や気づきと巡り会ってほしいと思います。自分自身の間口を狭めず、広い許容度をもって、多様な人々と接していくこと。それこそが、より豊かな人生や独創的な研究成果へと結び付いていくのではないかと考えています。



機能性材料などへの応用が期待される「テラードリキッド」の溶液サンプル